

学生たちの学校体験・学校知識体験： 「社会構造論Ⅴ（教育と社会）」を担当して

久 富 善 之

1. 受講生たちの「学校体験」ミニ・レポートの力作に接して

本学の非常勤講師として、共通教育科目「社会構造論Ⅴ（教育と社会）」（4単位）を担当して3年目になる。「教育と社会」の関連性の中で、この2年間は「近代学校制度の歴史的・現代的展開」という課題を具体的テーマとしている。

学校は、大学進学までにおよそ12年間それを体験して来た学生たちにとって、とてもなじみ深いものである。と同時に、ある意味では「正体不明」でもあるだろう。「なぜ誰もが満6歳から毎日のように学校へ行かなくてはならないのか?」、「学校では、どうして何十人かの学級に詰め込まれ、将来の効用も不確かな授業を毎時間受けるのか?」、「学校では、ある大人が＜教師＞という名前をつけて登場し、自分たちは＜生徒＞としてその大人の指示に従うことになっているのはなぜか?」、「学校での学習成績がとても重視されて、そのための集中した試験前学習や受験勉強に励むのはどうしてか?」、「先の見通しも不明確なまま、ほとんどの人が高校へと進学するのはどうしてなのか?」、などなど。

1年間講義の前半・夏学期は、上のような学校の不思議な性格を、その歴史的な成り立ちと学校制度内外の仕組み・秩序・働きを通して考えようとしている。後半・冬学期は、現代日本の学校教育問題（いじめ、不登校、受験競争、階層格差、非正規雇用増加、など）を通して考え、「学校改革」への視野を持とうとしている。

小論で検討するのは、毎学期の期末試験とは別に、受講者に提出してもらっている「ミニ・レポート」のことである。たとえば2008年度のテーマは、夏学期・

「最も思い出に残る学校体験」、冬学期・「自分にとって意味があった授業体験」であった。筆者の率直な印象では、このミニ・レポートの方が学期末・学年末の試験答案よりもはるかに「力作」が多いのである。そこから学べるものは何かを、どうしてもまとめて考えたいと思い、非常勤講師という身でありながら、「研究ノート」で投稿しようと考えた。

2. 「学校体験」ミニ・レポートでとり上げられた題材

非常勤1年目も、同様の「ミニ・レポート」は行ったが、特に課題意識がないまま、各レポートにコメントを書いて返却した。2年目はその返却の際に「受講者各人が、どのような題材を、＜学校体験＞や＜授業体験＞としてとり上げてレポートを書いているのか」に関心が出てきて、その点だけを勘定してみた。3年目の今年度も夏学期に同様の＜学校体験＞ミニ・レポートの返却の際に、同様の勘定をしてみた。レポート本文は返却しているので、ここで検討するのは「そこでとり上げられた題材の特徴」である（また、学年・学部・学科、あるいは性別による特徴もあるかも知れないが、それは記帳してないので分析できない。それに2008年度と2009年度とでは、開講時間が月曜4時限から3時限になり、受講者の学年・学部分布にも変化があったが、それも考察できていない）。

2年間の夏学期に共通しておよそ以下のような課題を4月に提示し、6月初めを締め切りに提出してもらった。

<ミニ・レポートの課題> これまで体験してきた「学校」（初等・中等教育：日本で言えば「小・中・高」）について、思い出としてもっとも心に強く残っている学校体験を具体的に一つとり上げ、それについてできるだけ具体的に（抽象的でなく）その内容・様子が伝わるように（エピソードなども含んで）記述しなさい。

- その体験が肯定的か、否定的かは問わない。ただし、学校に限る
- 体験の領域（授業、受験勉強、クラス、行事、部活など）も、限定はない
- 字数は、およそ「2000～4000字」程度で

この学校体験レポートでとり上げられた題材は、2008年度が表1、2009年度が表2である。分類項目は似ている面と、その年度のレポート内容の筆者による受け止めから若干異なる面とがある。表で見る限り、2008年度から2009年度への変化はそれほど大きくないし、その変化は重視する必要はないだろう。

この二つの「題材分類表」から筆者は、次の5点を考えさせられた。

表1 2008年度「(最も思い出に残る)学校体験」レポートの題材
(提出レポート・93通の「記述対象事項の分類と件数」)

分類 (1) 部活動 (32件)	・運動部 24件 ・文化部 8件	分類 (5) 授業と受 験 (9件)	・テーマ授業 5件 ・稲作体験 1件 ・受験体験 3件
分類 (2) 校外活動 (12件)	・修学旅行 5件 ・課外教室 4件 ・自然教室 3件	分類 (6) 学校の仕 組み・雰囲気・儀 礼 (7件)	・入校儀礼 1件 ・校則 1件 ・転校体験 1件 ・短期留学 1件 ・私立小の雰囲気 1件 ・中高一貫校で 1件 ・全校体操 1件
分類 (3) 学校行事 としての「祭」など (19件)	・体育祭 9件 ・文化祭 6件 ・合唱コンクール 4件	分類 (7) その他 (2件)	・民舞へのとり組 み 1件 ・体罰事件 1件
分類 (4) 生徒会・ クラス・友人・い じめ (12件)	・生徒会活動 2件 ・学級・その崩壊 4件 ・友人 1件 ・いじめ 5件		

表2 2009年度「(最も思い出に残る)学校体験」レポートの題材
(提出レポート・58通の「記述対象事項の分類と件数」、1通だけ2重に数えた)

分類 (1) 部活動 (22件)	・運動部 15件 ・文化部 7件	分類 (5) 教師の 姿・指導・評価 (5件)	
分類 (2) 校外活動 (5件)	・修学旅行 1件 ・課外教室 2件 ・鼓笛パレード 1件 ・中学対抗駅伝 1件	分類 (6) 授業 (1件)	・道徳の時間 1件
分類 (3) 学校行事 としての「祭」な ど (14件)	・文化祭 6件 ・体育祭 4件 ・合唱コンクール 4件	分類 (7) 現代学校 のあり方 (5件)	・学校全般への 批判 3件 ・12年間の学校 2件
分類 (4) 友人関係 (2件)	・友人 1件 ・いじめ 1件	分類 (8) 自分のと り組み・活動 (5件)	・受験 2件 ・進路選択 1件 ・肉体改造 1件 ・「チーム」活動 1件

①. 中学・高校生活における「部活動」の重要性

両年度とも「分類 (1) 部活動」の件数が全体の3分の1強であり、圧倒的な第一位である。彼ら／彼女らが「学校」と言って思い出すのが、小学校よりもまだ近い中学・高校であるという点もあるかも知れない。

それにしても、部活動が多い。運動部では「テニス」、「バレーボール」、「バスケットボール」、「野球」、「サッカー」などがあがっている。文化部では「吹奏楽」、「軽音楽」、「演劇」、「美術」、「鉄道研」などだった。記述内容は「苦しい練習とそれを乗り越えた挑戦・成長」の物語り、あるいは「部活内部の人間関係の難しさで悩みゴタゴタするが、それを越えてつながり合う」物語りがほとんどだった。運動文化にせよ、音楽文化にせよ、そこには若者たちがその獲得を求めたの努力があり、それに伴う競争や協同関係もある。それだけ部活動は、学校生活で印象的なとり組みであることは間違いないように感じた。

②. 「学校の○○祭」にかける情熱

「分類 (3) 学校行事としての『祭』」などが、両年ともそれに次いで多い。4分の1～5分の1である。「体育祭」、「文化祭」、「学園祭」、「音楽祭」、「合唱コンクール」などに、クラス対抗や、学年を通貫する組分け対抗でとり組んで、スポーツ競技や応援、演劇や合唱にとり組む。当初はそれに熱心な人と熱意のない人との分断があり、それでまともな練習もできず苦勞するが、何かを契機に「連帯と団結」が生れ、その準備過程の熱気・打ち込み。そして「祭」当日のパフォーマンス後には、大きな感動がある、といった物語りになっているものがほとんどだった。とり組み過程での「成績順位へのこだわり」と、終わったときの「結果順位を越えた達成感」とが、レポート文面にあふれていた。

③. 校外に学校で出かけることの意味

件数がそれに次いでいるのは、「分類 (2)」の校外活動（「修学旅行」や「課外教室」など）である。いつもは、教室や学校キャンパスという空間に詰め込まれている集団が、その学校で形成された集団で、学校外に出かけることに特別の意味

があるように思えた。②と③とは、ともに学校の「日常」に対する「非日常」である。そこには「日常」では得られなかった「開放」とそこでの新しい体験があるのだろう。

④. 学校内の日常のなかに

「分類 (4)」の学校内の生徒会、友人関係、「いじめ」、「学級崩壊」についても件数は多くはないが、書かれていた。また学校の仕組みや教師のあり方についても、一定数の記述があった。それらの中では、肯定的な体験はまれで、ほとんどが否定的ないし批判的な体験だった。その点では、学校の日常生活や教師のあり方に対しては、かなりの「不信と不満、あるいは恨み」を残しているとの印象を受けた。

⑤. 授業はどうなっている？

両年を通して授業は（受験を含めて）10件である。考えてみると、学校生活で最も長いのは授業時間であり、それがもっとあってもよさそうに思うが、「思い出としてももっとも心に強く残っている学校体験」と言われるとそれは出てこない。10件は「テーマ学習」や「道徳」や「受験」であり、教科授業は一つも出てこなかった。「教科の授業を通じて、素晴らしい達成感や感動があってもよいはず」と思うのだが、そうではなかった。これは成城大に限ったことではなく、筆者がかつての本務校や、集中講義の際に他大学で同様の「学校体験」レポートを書いてももらった場合にも共通の傾向であった。その点を一番考えさせられてしまう。

以上5点の題材傾向から改めて考えることは、学校体験として感銘を残すのは、

- (a) スポーツ文化・音楽文化などの文化的課題への挑戦と、その獲得・自己成長の確認
- (b) 「祭」や「校外活動」などの非日常的イベント・フェスティバルに打ち込んだ熱情
- (c) その2つのどちらにも伴っている「生徒たちの集団活動」、つまり目標を持った部活やクラス対抗のような集団活動が（もちろん感動を残す「良きシ

ナリオ」の場合だろうが) 途中経過の紆余曲折やあれこれの危機的關係を越えて到達する「連帯感」、

といった、およそその3つが主要だという点である。学校が多くの生徒たちに、このような「感動・思い出」を残しているということは疑いなく、その意味では学校がそこで過ごす子どもたちに「かなり大きな意義」を持っていると考えることができると思う。

ところで、授業も集団で受けているし、その中には明らかに「文化的課題」への挑戦と獲得・達成があるはずである。にもかかわらず、教科の授業が一つも出てこなかったのはなぜだろうか? 「学校知識 (school knowledge: 学校で子どもたちが<学ぶべき>とされている知識群のこと)」への挑戦・取り組みは、どこが「部活」や「祭」と異なるのかをどうしても考えさせられてしまう。

(イ) 「学校知識」は「それは何であり、どういう意味があって、何のために役立つのか」が見えにくくできているため、学校知識獲得が「文化的課題である」と子どもたちに感じられていない。そこに学校知識の基本的弱点があり、たくさんの教材・教具や教授法の工夫にもかかわらずそこを越えられていないとも考えられる。

(ロ) 「学校知識への挑戦と獲得」は、授業という集団場面で行われているが、それは「一つの目標に向かって、途中いろいろあっても集団的な努力と連帯に達する」というようには容易にはならない。むしろそこでは「個々人の獲得程度が比較され、順位づけられる」ような、集団を分断する力の方が学校では強く働いており、それを乗り越えるような「集団的交流と集団的獲得のある授業」が成立するのは容易でない。

(ハ) 授業は学校の「退屈な日常」・「おもしろくない勉強」の象徴的時空間であり、「非日常」で開放されるような「感動を受け止める感性」は、そこでは働かないように長年条件づけられている。

(イ) (ロ) (ハ) は「必然で仕方のないこと」なのか、それとも「今日の学校知識と授業のあり方が問題で、可能性はあり得る」のか、その点を考え続けたいと思う。

3. 「思い出に残る授業体験」レポートの分布から読み取るもの

以上のような課題意識から「改めて＜授業＞だけにしほった場合はどうだろうか」と考え、2008年度・冬学期のミニ・レポート課題を以下のように提示した。

小・中・高校の学校体験の中で、「興味深かった」、「熱心にとり組んだ」という意味で思い出に残る授業を一つ選んで、それについて授業体験が伝わるように記述しなさい（授業は、1時間だけのことでも、一単元でも、1学期や1学年・数学年にまたがっても構わない）。

<注意> 夏学期同様、具体的に伝わるように

なお、課題提示の際「もし『興味深い・熱心にとり組んだ』という授業が一つもない人は、『どんなにつまらなかったか』を書いても構わない」と口頭で補足した。

提出された87件のレポートは、やはりコメントをつけて返却したが、今回はその授業がどの学校段階・学年だったかも記帳した。ただし結果を示した表3は、学年までは示していない。また「理科」と「社会」という教科は、高校ではより細かい科目までであるが、それも合算されている。

この表を見て考えたこと、今後考えたいことを述べて、本研究ノートのまとめとしたい。

①. 「特別な時間」が小・中・高ともに多い

表の右端になる「総合的な学習の時間」と「課外教室・自由研究・聖書など」という教科の授業ではない特別な授業形態、あるいは「生活科」という合科形態がとり上げられている件数は（小・中・高通慣、中・高通慣を、各学校段階に加算すると）、小学校13件、中学校9件、高校9件とどの段階でも多く、合計では30件と3分の1強である。学校での時間数としてそれほど多いとは思えないが、生徒自身が活動し主体的にとり組み、またそこに集団活動もあったような、こう

表3 2008年度「(思い出に残る)授業体験」レポートの題材
(提出レポート・87通の「記述対象教科他の分類と小・中・高校別件数」)

教科・領域 など 学校段階	国語	算数・ 数学	理科	社会	英語	美術	音楽	習字	家庭科	保健	体育	生活科	時間 総合的な学習の 時間	研究・ 授業・ 自由 など	学校 段階・ 計
小学校時代	3件	1件		2件	1件							1件	6件	6件	20件
中学校時代	3件	1件	2件	2件			1件		1件		1件		6件	2件	19件
高校時代	5件	3件	1件	7件	6件		2件	1件	1件	2件	7件		2件	6件	43件
中・高通慣				1件	2件									1件	4件
小・中・高通慣						1件									1件
教科など・計	11件	5件	3件	12件	9件	1件	3件	1件	2件	2件	8件	1件	14件	15件	87件

いう授業が「熱心に」とり組まれ「思い出」にも残る傾向が強いと言えよう。

②. 意外と「健闘」している教科の授業

と同時に、教科の授業も（前期レポート題材でのイメージと違って）意外に多くなっている。表の左側の「主要5教科」と言われるような知的教科でも、合計で40件になっており、とりわけ高校で多い。その教師の学識・経験の深さや、授業での大胆なとり組みと活動、教師の熱心さなどが、読んだ筆者の印象に残っている。生徒たちは、そういうものを感じ取る「感性」を失っているわけではない、という点に希望を抱くのは楽観に過ぎるだろうか？

③. 芸術・体育教科も

美術・音楽・習字・家庭科・保健・体育といった諸教科も、合計17件、とりわけ高校段階だけで14件になっている。ここでは、その授業を通じた感動的体験が書かれていた。

④. 高校が教科授業で特別多い

②と③という教科の授業が、ともに高校が多かった。高校は大学生から経験が近いということもあるかも知れない。だが、高校までになると小・中時代の「文化的意味が見えない」という状態を乗り越えるような、それぞれの教科内容が持つ意味への反応があると思われた。

⑤. 教科授業の文化的意味の回復を

以上を通して、教科授業が文化的意味を生徒たちに感じさせるような「学校知識の意味回復」が重要ではないかと思う。それは表3ではあまり目立たない「小・中学校」でも重要な点である。また、高校でその可能性が広がっているとすれば「大学ではもっとそうだ」ということになり、大学の講義の重要性を考えさせられる。